

コラム61：植物物語 （2017年10月）

植物への常識が変わる出来事がありました。

それは昨年夏、7月下旬の厳しい猛暑が続いている頃でしたね。そんな時に土地の造成の都合で、植木を切らなくてはいけなくなったのです。それは高さが3m以上にもなる大きなキンカンの木でした。これは私が花市場に入社してまもない頃に、5寸位の小さな鉢を買って帰り、地植えをして長年育ててきたものです。大した管理をしたわけではないのですが、土壌が合ったのでしょうか、大きく成長して、毎年黄色い実をドッサリと付けてくれたのです。

そう簡単に諦めたくなかったもので、伐採ではなく移植を考えました。「殺す」のではなく、別の場所で生き延びてほしかったのです。それのための対策として、私は掘り起し前にバッサリと剪定して、葉が全くない丸裸状態にしました。せっかく枝を伸ばし、葉を茂らせて、来年の実を沢山付けているものを、可哀想なモンですよ。こうする方が、助かる可能性が高くなるゆえ、仕方なかったのです。

そして、35度にもなる猛暑のなか、根巻きなどというメンドクサイことはしないで、重機で地面から剥がすかのごとくに無理やり引き抜き、そして根幹の部分は鋸でほとんどブチ切って……ヒドイものです。真夏にやってはいけないことで、キンカンにとってこんな非情な行為はありません。ヒトに例えれば、体に重傷を負っているのに、衣服を剥がれて、厳寒の荒野に裸で放り出されるようなものです。こんな状態で生き残れる筈もありませんから、私は生存の可能性はほとんどない、もしあるとしても、1割もないだろうと思いましたね。



そして、それから2-3週間後のことです。水やりをしつつ、フツと寒冷紗の中を覗いて幹を見ると、何もなかった木肌から小さな葉芽が沢山出ているのですよ！

すぐにカミサンに知らせてやりました。彼女もこの木には、かなり未練があったのです。

「キンカン生きとるみたいじゃ！大丈夫かもしれんよ！」

「ホンマに？エカタねえ！」

「スゴイよ！大したヤツじゃのう」

これはほとんど奇跡的だと思いますね。真夏にあんなにヒドイことをして、植物の常識では考えられないことです。「瀕死の重傷で息もたえだえ」状態のコイツに、私は出来る限りのことをしてやりました。ともかくは根元にしっかりと土を盛り、根の周りを掘って「水受け」を造り、朝晩2回タップリと水やりをしました。その上で、これはイチゴ栽培でお世話になっているFさんのアドバイスですが、水受けにモミガラを入れてやり、幹と根元にコップリと寒冷紗をかけてやりました。真夏の強い光から、少しでも身を守ることができるようにしたのです。

それから9か月、今年の春、5月初め頃でしたか、いつもの年より葉はかなり少ないものの、いつもの年よりずい分と少ないものの、黄色い可憐な実をしっかりと実らせてくれたのですよ。

「どうや？スゴイじゃろ！」と、コイツはドヤ顔で自慢しているようでしたな。

「オマエ、よくガンバッタなあ！」すばらしい生命力に拍手ですね～♪♪♪～

それから半年、現在はしっかりと葉も枝も出て、沢山の青い実を付けていますよ。まだまだ、移植前ほどではないですが、寒くなって黄色に成ってくると、さぞ見事なことでしょう。

植物というのは、人間が考えているよりも、ずっと強い生命力を持っているのかもしれない。



私が車の修理や点検でお世話になっている会社の事務所に、「その花」はありました。車検に出した時ですから、二年前の夏のことでした。車検の支払いをしようとして、カウンターの上の胡蝶蘭（ファレノプシス）に目が入ったのですね。定年退職しているとはいえ、市場勤めで長年花を見てきたので、やはり気になるんです。そこに飾ってあったのは、贈答用の五本立ちの大輪の胡蝶蘭。ただし、花はかなり傷んで、見るに堪えない状態で、あとはゴミとして処分されるのを待つだけという感じでしたね。そこで、可哀想になって、ツイツイ言ってしまったのですよ。

「なんなら、これウチで引き取りましょうか？なんとかなるかもしれませんから」

「エエー！いいんですか？そうしてもらえれば助かります」

「ウマくいけば、半年位で咲くかも知れんですけど、ダメかもしれませんからね」

「ソリゃあ、ぜんぜん気にしてもらわなくても大丈夫ですよ」

というわけで、それから「このラン」との長い付き合いが始まったわけですよ。

実を言うと、私はあまり自信はなかったのです。中輪系の小型の胡蝶蘭はそれまでに何度も咲かせたのですが、大輪系はウマくいかなかったのですよ。ともかくは持ち帰ってから、まずやったことは、終わって傷んでいる状態の花を全部根元から切ってしまうこと。中輪系の場合は、一節か二節を残してカットしたら、次の花が早く出たりするようですが、今回はそれをやめました。時間をかけても、立派な花を見たいと思ったのですね。

それから、大鉢から抜き取って、一株ずつ小さな鉢に植え替えをしました。これは以外に簡単な作業でした。このような胡蝶蘭の大鉢というのは、花の付いた一本立ちのビニールポットを、大抵はそのまま寄せ植えしているのですね。それゆえ、鉢から抜いたら、そのまま大きさの合う陶器鉢に入れたらいいのですよ。もちろん、付いていた支柱などはその時に全部外してしまいます。ということで、一株ずつ水苔で植えたランの鉢が5つ出来たわけです。それから1年後の夏、5鉢のうち2鉢に花が咲いてくれました。しかし、それは輪数も少なく、花丈も小さく、納得のいくものではなかったですね。預かり先の会社に持って行っても、あまり喜ばれなかったですね。「やっぱり大輪は難しいか」と落胆しましたが、有望と思われる株を2鉢だけを選抜して残し、もう一度再挑戦することにしました。今回ののは、それからさらに一年後の成果というわけです。



最初に成果を報告しましょう！

やっと見事な花が咲いたのですよ。ホンマに立派なモンです。草丈は60cm位で、枝咲きの11輪付き。花の直径は12－13cmで全部の花が同じ位の大きさと、綺麗に揃っています。「よくぞ、これだけ形よく花が付いたくれたな」という思いでしたね。葉数が8枚もありましたから、株に力があつたのでしょう。

本音を言いますと、「どうや、スゴイじゃろう！」と、自慢をしたいのですよ。「カワイイ犬」なんかの場合でもそうですが、自分の「自信作」だと、人に見せたいし、言いたいものなんですね。そういう意味で、これから先は、いわゆる「自慢話」となります。私は花市場勤務の時の知識が少しはありましたが、ハウス設備もプロの技術ありません。「素人」が挑戦した「花づくりの経験談」として聞いてもらえればいいと思いますね。

一年目の栽培に失敗して、半ば「アキラメ状態」になっていた私が、小さな花芽を見つけたのは、去年の12月、年も押し迫った頃でしたね。シャモジのような分厚い葉が相似形に左右4枚ずつあり、左の2枚目の葉の下、付け根から小さな花芽が出ていました。左の写真の小さな花芽は今年の1月2日、真ん中の10cm位に伸びたのは1月22日、そして右の写真のような最初の花が完全に咲いたのは4月17日でしたよ。「ついにヤッタぜ！」という感じで、ウレシカッタです。それから、一週に一輪というペースで咲いて、上のような満開状態になったのは、6月12日でしたね。花芽が見えてから完全開花まで、6か月もの時の流れが必要だったのです。ラン、特に胡蝶蘭というのは、開花までに非常に時間がかかります。そして、それこそがこの花の魅力でもあるんですね。



これからは「いかにして管理したか」という話になります。まずは、どこに置くかという問題ですが、夏から秋にかけては家の外でいいと思いますね。家の東側の軒下で、昼間の直射日光の当たらない、半日陰の場所というのが理想ですね。夏場の強い太陽光に当たると、ほんの短時間でも葉が焼けてしまいますから要注意です。あとは水やりですが、ラン科の植物は、シンビなどは別として、基本的にあまりジャブジャブやるのはいけないようで、表面が乾いたらシッカリやるというスタイルがいいですね。私の場合は、夏場は2－3日に一度、冬場は1週間に一度程度でしたが、これは天候や気温によって変わってきます。500倍の液肥を水と交互にやりましたが、これは効果があったと思いますよ。肥料としてやったのは、これだけです。

胡蝶蘭はランの仲間でも、寒さには非常に弱い種類ですね。ですから、厳寒の時期でも生産者のハウスでは20℃以上で管理されているようです。そうすると、一般の家庭で作るのは無理だということになりますが、そんなことはありません。私はイチゴハウスがありますが、その設定温度は低いので、この花を入れるわけにはいかないのですよ。すぐに低温障害が出て、葉がダラリとになって、黒く変色してしまいます。だからといって、この花のために設定温度を10度以上に上げたら、油代が大変なことになります。そうすると、冬場の管理は家の中の窓辺でするしかないのです。

ウチの場合は、台所と食事、TVを見るところが同じ部屋ですから、そこが唯一の暖房をする部屋になっています。その窓辺に置くことになるのですが、昼間のいない時には当然暖房は切ります。それでも、天気がよければ十分暖かくなるのです。夜間に暖房を切って眠る時は、部屋の余熱を逃がさないことが大事なのです。必ずブラインドを下ろす必要がありますが、厳寒期にはそれだけでは不十分です。それゆえ12月－2月には、寝る前に窓に発砲スチロールの板を張って、保温に努めましたね。ともかく13度以下に下げないための工夫と努力が大事なのです。

綺麗にそろって咲かせるには、もう一つ大切なことがあります。花が咲き出す前に、支柱を立てる必要があるのです。軽く自然な曲がりのアーチ型が理想ですが、ここで無理に曲げようすると、「大きな失敗」をすることがあります。実を言いますと、私はそれをしてしまいました。持っていた2鉢に両方に蕾が付き、それまで順調に育っていたのです。そして、花丈が伸び、蕾がふくらんできた3月の半ば頃、支柱立てをすることにしました。この時に、出来るだけ格好の好い咲き方をさせて、ほんの少しだけ強く曲げたのです。「ボキッ」といぶ音がした時は、もう遅かったですね。付け根から折れていました。ナサケナカッタですよ。



「せっかく、ここまで育てたのに……」

それから、一か月後には、もう一鉢の開花が始まったですからね。未練がましく、折れた長い花軸を持っている私の写真を見れば、その時の気持ちがわかってもらえると思います。これは「悔しい失敗」の一枚ですね。

「覆水盆に返らず」一折れた花を元の株に着ける方法はないのです。

支柱立ての後に注意することは、花を陽の当たる方へ必ず向けておいてやること。そうしないと同じ向きにそろった綺麗な咲き方になりませんからね。これはどんな花にも言えることです。そして最後に、一番大切なことを一つだけ－それは「愛」ですよ。それも、心に秘めた愛情ではなく、表現することが大切です。毎日見て、話しかけてやってください。大きな声で言う必要はありません。小さな「つぶやき」でいいのです。そうすることで、植物があなたを「元気」にするのです。何を話しかけて？例えばこんな感じです。

「オー！スゴいね。今日は又一輪咲いたね。綺麗だよ！」

植物と話が出来る人というのがいます。農業の世界における「名人」といわれる人たちのことです。花市場に勤務していた時代に、全国各地の栽培ハウスを視察し、沢山の生産者と会う機会がありました。胡蝶蘭、シクラメン、花苗など作っているものは違っても、その世界での最高の商品を、いつも作れる人というのがおられました。その頃、洋ラン栽培をしていた父が、高知のある生産者を指して、「あの人はランと話が出来るんじゃないかな」と、言ったことがあります。

そうなんです。良いモノを作るためには、彼ら植物の、不満や要望を聞くことが出来ればいいのですが、生産者の中には、それが出来る人がいるのです。「名人」といわれる人は、植物の姿や色、そして花や葉や根の状態を見ることで、あたかも彼らに話を聞いたかのように、「どうして欲しいか」ということがわかるんですね。そして植物の健康状態をしっかりと把握して、日照・水・肥料・病害などの対応ができるのです。だから、「今年は異常気象だから、いいモノがでせん」などという「言い訳」することなく、いつでも最高の商品を作ることが出来るのです。

先日、早朝のラジオを聞いていると、こんなことを言っていましたね。定年後に、何もしない人と、農業をしている人を比べると、農業従事者は3割も医療費が少ない。つまり、病気しないで元気であるということですね。。そして、さらに驚くのは、平均寿命が8歳も長いというのですよ。これは仕事をしつつ聞いた未確認情報ですから、多少の聞き違いはあるかもしれませんが、しかし、何となくわかるような気がするのですよ。農業をやると、体を動かすだけでなく、頭もシッカリと使う必要があります。植物は、人の「働きがけ」と、日照や温度などの「自然の力」で、毎日変化してゆきますから、常にそれに対応していかななくてはならないのです。そのことが、人の心に「張り」を与えてくれるのですね。

私もイチゴ栽培という形の農業を始めて、今年で7年目。かなりの経験を積んだつもりですが、わからないことや失敗が沢山あります。私は「名人」の領域には程遠いですから、いつも先の読めない模索を繰り返している、という感じですね。それがこの作物の奥深いところであり、楽しみでもあるのですよ。今年のイチゴの苗の定植は9月9日から始めました(写真左)。カミサンの手伝いのおかげもあって、3日間で750株を植え終わりました。あとの不足分は、自家製のランナー苗で補足していくことになります。それから一か月、10月10日現在(写真右)、苗の生育はきわめて順調。葉数も7ー8枚で草丈も30cm以上となり、すでに花芽も上がって、この分では12月の初めには出荷が始まりそうな状態ですね。



イチゴ苗の植え付けの時に、いつも思うことがあります。
＜ワシが動けなくなったら、コイツらは生きて行けん。来年の6月頃に終わるまでは、絶対に元気で居らんといけん＞

まだまだ若いつもりでも、この齢になると、ヤッパリどこかに不安があるんですな。ツイツイそんなことを考えてしまうのです。しかし、「いつまでやれるか」などと、先のことを心配して生きるのはやめたいと思いますね。台風などでハウスが壊れたり、病気や怪我で動けなくなった時には、アッサリ止めればいいのです。もう7年もやってきたんですから、それほど悔いはありませんね。

「やれるうちは続けるし、出来んようになったら、止めりゃあエエ。それでイイのだ！」

＜追伸＞

以前のコラム「おっさんのつぶやき 会社編」の「その40 花の心 '09・4」において、「もしかしたら、植物には感情や心があるのではないか」という話を書いたことがあります。講演会において、科学的データにもとづく話として聞いたのですが、私自身もにわかには信じられませんでしたね。しかし、植物が人の愛情を感じることができるとしたら、育てる方も「今日はキレイだね」と褒めてやりがいもあるというものです。私もその話を聞いてから、植物の水やりや植え替えをした後では、彼らが喜んでるように見えてきました。それが植物との付き合いということですし、それが植物に「生きるパワーをもらう」ということではないでしょうか。今年のお歳暮商戦は「カープ」と「健康食品」という記事を見ましたが、そんなふうに考えれば、花だって「心の健康食品」ですよ。

<セロームのつぶやき>

私のイチゴの納入先である広島市内のP洋菓子店の、入り口を飾る見事なドラセナ・セローム。実を言うと、コイツは市場のゴミ捨て場の中から、再生したのですよ。

「おっさんのつぶやき 会社編」(その14 趣味の園芸 '07・3・17)にこんな記述があります。

「昨年の春に、全く葉のない状態でゴミの中に捨てられていた観葉・セロームの尺鉢は、夏になる頃には見事な葉を一杯に繁らせて、わが家の玄関先を誇らしげに飾っていたのである」

そう、10年前の「あのセローム」が今は尺三の大鉢に入って、威張っているのですよ。

ちょっと話を聞いてみましょうか？

「スゴイ立派になったねえ。どんな気分かいの？」

「そりゃあ、こういう広々としたところで皆に見てもらえるいうんは、エエモンよの！」

「スゴク大きくなったけど、ずっと同じ鉢に入っとったん？」

「チガウんよ！ワシは10年前に拾われたセロームの子供になるんよ」

つまりは、親株を株分けした二代目ということになるんですね。＜親御さん＞の方ですか？

同じくらいの大きさに成長して、シッカリとご健在ですよ。



<シンビのつぶやき>

私は11月になって気温が5℃を切るようになると、外の置き場に置いていたシンビを、ハウスの中に取り込む作業をします。ほんの10鉢程度ですが「趣味の園芸」をしているわけです。その際に、株の傷んだものや、新芽の出ていないものは処分するんですね。その時に捨てたものを年明けに見ると、2鉢ほど花芽が付いた株があったのですよ。枯れた葉を刈り取って雑草を除けて、ハウスの中に取り込んでやりました。すると、この4月初め二鉢そろって、とてもキレイな花を咲かせました。二人で何か話しているようですから、ちょっと聞いてみますか。どうも私の悪口のような。



「ねえねえ、見かけがブサイクとか、将来性がないからいうて、捨てるというのはヒドイと思わん？」

「ほいで一度捨てといて、花が付いとるからいうて、また拾って助けるんじゃけえね」

「ホンマに、身勝手なモンよねえ」

「ハウスの中に入れるいうても、内張りの外の暖房のかからん所じゃけえね。寒かったわ」

「セロームさんや、タマシダさんの隣じゃたもんね。」

「同じランでも、胡蝶蘭さんはモノスゴク大事にされとるよね」

「悔しいから、今回は特にガンバって、キレイな花を咲かせてやったんよ」

「絶対に、ウチらは胡蝶ランさんに負けとらんよね」

……ハウスの片隅で二人の話は続いていました。シンビも確かにキレイだと思いますよ。